

第 66 回東海北陸教育・保育研究大会「岐阜大会」

報 告 書

期 日 令和7年7月17日（木）・18日（金）

場 所 じゅうろくプラザ 他

主 催 社会福祉法人 岐阜県社会福祉協議会
東海北陸ブロック保育協議会

第66回東海北陸教育・保育研究大会「岐阜大会」日程

【大会第1日目】 7月17日（木）全体会 じゅうろくプラザ ホール

11:30～12:30	運営委員会 I	(じゅうろくプラザ)	
12:00～13:00	受付		
12:30～13:00	オープニングセレモニー	アンサンブルさくら	
13:00～13:30	大会式典		
	開会の言葉	岐阜県保育研究協議会長	可児 亨
	保育の歌斉唱		
	児童憲章朗読	岐阜県保育研究協議会副会長	山本 早霧
	主催者挨拶	岐阜県社会福祉協議会長	森川 幸江
		(代理 常務理事	村田 嘉子)
	来賓祝辞	岐阜県知事	江崎 禎英
		(代理 岐阜県子ども・女性部長	片桐 伸一)
		岐阜市長	柴橋 正直
		岐阜県議会議長	小原 尚
	来賓紹介		
	大会宣言	岐阜県保育士会長	仲野 悦子
13:30～13:50	基調報告	全国保育協議会副会長	森田 信司
13:50～14:20	研究発表		
	テーマ	「会員が主体的に参加する他園との合同研修のあり方 ～保育力・保育の質の向上をめざして～」	
	発表者	美濃加茂市保育研究協議会	
14:20～14:30	休憩		
14:30～16:00	記念講演 演 題	「紺野さんの子育てよもやま話～絵本の朗読とともに～」	
	講 師	俳優 紺野 美沙子	
16:00～16:10	全体会閉会式		
	次期開催県挨拶	富山県保育連絡協議会長	小島 伸也
	閉会の言葉	岐阜県保育研究協議会副会長	川上 城
16:30～17:15	分科会打合せ会	(じゅうろくプラザ)	
18:00～19:30	運営委員会 II	(ホテルグランヴェール岐山)	

【大会第2日目】 7月18日（金）分科会 じゅうろくプラザ、ハートフルスクエア G、
ホテルグランヴェール岐山

8:30～ 9:00	分科会受付（各会場）	※ハートフルスクエアGのみ 8:45～9:00
9:00～12:00	分科会討議（8会場）	

第66回東海北陸教育・保育研究大会「岐阜大会」参加者数

	参加者 総数	分科会参加者数(人)								その他
		1	2	3	4	5	6	7	8	
岐阜県	331	52	80	54	19	19	45	17	15	30
愛知県	110	20	30	33	2	3	18	0	1	3
三重県	39	5	11	7	1	2	2	5	6	0
富山県	26	2	5	7	2	1	2	1	3	3
石川県	42	6	10	15	4	1	4	0	0	2
福井県	32	7	4	9	0	4	4	0	1	3
合計	580	92	140	125	28	30	75	23	26	41

※表内の「その他」欄に記載の人数は、全体会のみ参加する人数等を表します。

全体会報告

第66回東海北陸教育・保育研究大会「岐阜大会」 全 体 会

オープニングセレモニー



アンサンブルさくらのみなさん

開会の言葉



岐阜県保育研究協議会 会長 可児 亨

保育の歌斉唱



岐阜県 保育士のみなさん

児童憲章朗読



岐阜県保育研究協議会 副会長 山本 早霧

主催者挨拶



社会福祉法人 岐阜県社会福祉協議会
常務理事 村田 嘉子

来賓祝辞



岐阜県子ども・女性部長 片桐 伸一 様



岐阜市長 柴橋 正直 様



岐阜県議会議長 小原 尚 様

大会宣言



岐阜県保育士会 会長 仲野 悦子

基調報告



社会福祉法人 全国社会福祉協議会
全国保育協議会 副会長 森田 信司 様

研究発表



美濃加茂市保育研究協議会



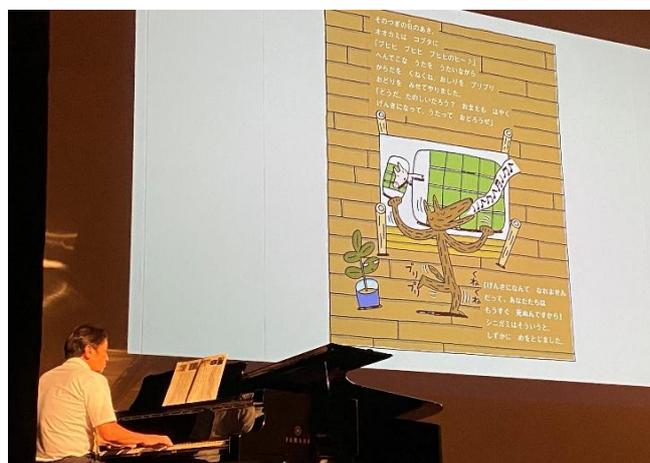
記念講演

俳優 紺野 美沙子 氏



朗読会

才オカミ役 岐阜県保育研究協議会 会長 可児 亨



ピアノ伴奏 岐阜県保育研究協議会 副会長 佐々木 真

分 科 会 報 告

第1分科会 新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

【司会者】	石川県 わかばこども園	園長	西田泰幸氏
	岐阜県 高富保育園	総括	川上城氏
【助言者】	岐阜県 東海学院大学短期大学部	教授	杉山喜美恵氏
【意見発表者】	愛知県 かわさき保育園	主任保育士	宮花知雅子氏
		保育士	石川三恵氏
	岐阜県 飛騨市立旭保育園	園長	青山ひとみ氏
【記録者】	岐阜県 郡上市立幼児教育センターみなみ園	園長補佐	山田昌子氏
	岐阜県 下呂市立わかばこども園	園長	熊崎典子氏
【幹事】	岐阜県 飛騨市立河合保育園	園長	大下安子氏

1 意見発表の概要

○「自分らしくいる子どもから子どもの育ちを理解する」～ドッジボールあそびを通して～

愛知県 かわさき保育園

プール遊びを通して、子ども達の中から「もっとプールで遊ぶ時間を長くしてほしい」と意見が出され、園長先生に嘆願書を書くという行動につながった。自分達で考え行動する中で、主体的に動きながら成長していた事例である。

保育者が子ども達の声に耳を傾け、サークルタイムを通して自分達の意見を積極的に発信するようになった。また、熱中症について、園医の医師から話を聞き学んだり、自分や友達の体調を確認するなど、管理能力も高まり、主体的な行動を通して達成感を味わった。

失敗して悔しい思いや様々な感情を味わいながら、どうしたらよいかを考える力も養われてきた。大人にとって当たり前のことでも、子どもの目線からの声を大切に、サークルタイムの有効性を認めつつ、興味を持ったことに取り組み、環境を整えながら活動を広げていった。

○「子供たちの豊かな育ちのために」

岐阜県 飛騨市立旭保育園

飛騨市では「心豊かな子に」をテーマに、各園が日々保育にあたっている。旭保育園のある神岡町でも少子化が進み、園児数の減少により集団規模が小さくなることで、園児が様々なことを経験する機会が少なくなるという課題がある。こうした状況の中、多様化する保育ニーズに対応しつつ、今後も持続可能で特色あるサービスを提供していくため、公立と私立の機能や良さを併せ持つ施設として「公私連携保育所型認定こども園」の新設を予定している。

その中で、健やかな育ちのための保育として、①身体づくり ②心を育む ③要支援児の保育 ④要支援児保護者への対応 ⑤子ども達の育ちを未来につなぐために、の5つの視点から保育実践を紹介した。また、新施設のスームズな開園に向けた準備も進めている。

今後の課題として、行事のための保育にならないよう「子どもたちの土台をつくっていく保育」を掲げ、日々取り組んでいる。

2 討議の概要

テーマ「これからの保育の質の転換に向けてどのように取り組んできたか」

- ・子どもの主体性と保育者の主体性について、保育者自身が楽しむことが子ども達の主体性を引き出すことにつながる。職員間の風通しの良さも保育の質を高める要因である。
- ・サークルタイムが形骸化している現状が指摘され、子ども達が自分の気持ちを受け止めてもらい、意見を言ってくれたと思えるような場とするため、目的を明確にすることの重要性。
- ・公立・私立保育園間の交流には難しさもあり、園長や主任保育士の交流を通じて情報共有を深めていく必要がある。

- ・サークルタイムの有効性を認めつつ、集団の中で意見を出しにくい子への配慮や、答えのない話題から始めることの有効性が提案された。大人が環境を整え、子どもの興味を全体へと広げていくことが大切である。
- ・保育士同士の対話の重要性。職員室に意見交換の場を設けたり、互いに褒め合う文化を醸成する取組を行っている。
- ・プールの時間の確保や行事のあり方について、改めて検討していく必要がある。
- ・主体的な遊びができる環境づくり。遊びの環境を残しつつ、子どもと保育者が一緒にルールを決めていく。
- ・幼児と乳児では主体的な姿の表れ方が異なる。制約が多い中でも、子どものやりたいことを尊重する努力が必要である。
- ・保育園の統合にあたっては準備期間を設け、子どもや保育者の交流を深めていくことが大切である。

3 助言者の言葉

<意見発表より>

「新たな時代」をどのように捉えるか。2つの発表からは、今の時代の大きなテーマであることがうかがえた。地域の状況を踏まえ、その中で質の高い乳幼児保育をどのように提供していくのか、改めて考えさせられる内容であった。

- ・地球温暖化について

大人主体の一方的な対応になりがちな問題を、子ども主体の取組にできた点について、ミーティングやサークルタイムの手法が効果的であったように思う。ミーティングでは保育者が主体になってしまうことも多いが、きっかけをつくるのは保育者であっても、継続していくことで子どもたちも理解し、子どもたち自身で考え、進めていくことができるようになる。主体性を育むためには、何を主体性と捉えるのかなど、保育者の資質も問われる。

- ・少子化、人口減少について

丁寧な保育ができる一方で、子どもたちの経験は減少しがちである。人口減少地域において、子どもたちに安定して質の高い保育を提供していくためにはどうすればよいのか、考えていく時期に来ている。

平成30年に改定された保育所保育指針が7～8年目を迎えようとしている今、「主体的・対話的で深い学び」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について、自園ではそれを達成するためにどのように保育に取り組んできたのかを振り返ることが必要である。社会情勢が変化していく中で、自分たちの地域や園では何を目指し、どのように取り組んでいくのかを改めて考える必要があるのではないかと。

<講評>

「保育を支えていく」ということにおいては、保育士の覚悟がとても大切である。保育士を目指す人が減少している今、せつかく志をもって目指してきている学生や、働き始めた新人保育士をしっかりと育てていきたい。質を担保していくためには、ゆとりのある保育が不可欠であり、そのためには保育士の確保が重要である。地域、園、養成校が連携し、一丸となって保育士を育てていくことが「保育を支えていく」ことにつながっていくことを願いたい。



第2分科会 配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて

【司会者】	三重県 山郷こども園	園長	森 夏美氏
	岐阜県 蘇原南こどもえん	園長	仲野悦子氏
【助言者】	岐阜県 岐阜聖徳学園大学短期大学部	教授	徳広圭子氏
【意見発表者】	福井県 金津東こども園	保育教諭	丸子知美氏
	岐阜県 蘇原南こどもえん	主任保育士	三島尚子氏
		保育士	永末麻由氏
【記録者】	岐阜県 多機能型地域子ども安心センター	所長	植田佳保利氏
	岐阜県 岐南さくら認定こども園けやきの杜	園長	榎佳代氏
【幹事】	岐阜県 山県市立大桜保育園	園長	山之腰恵美氏

1 意見発表の概要

- 「配慮を必要とする子と、保護者支援について考える」 福井県 金津東こども園
- 園内でケース会議を行い、気になる子どもについて話し合うとともに、関係機関への相談や研修への参加を通して学びを深め、保護者支援について検討してきた。巡回カウンセラーの助言や研修を受ける中で、「愛着」という新たな視点に気付くことができた。これまで配慮を必要とする子の行動を発達の問題として捉えることもあったが、似たような症状が現れている可能性もあると考え、子どもを多角的に見てその子に合った支援を行う必要性を感じた。学んだことを園内で共有しながら、ケース会議で継続的に話し合いを行ってきた。
- 事例を通して、子どもが何に困っているのかという課題が見えてきた。また、愛着の視点から子どもを見守ることの大切さを学び、子どもの困り感を一つの要因に決めつけるのではなく、さまざまな視点から理解することの重要性を感じた。今後も子ども一人ひとりに寄り添いながら、家庭への支援にもつなげていきたい。

- 「異年齢保育を通して子どもの成長と気になる子への対応」 岐阜県 蘇原南こどもえん
- 保育者が子どもの育ちを理解することで適切な援助ができること、また異年齢保育により子どもが自己を発揮し社会性が育まれることを仮説とし、保育記録や保育カルテの活用、異年齢保育の実践、専門家とのケース会議を通して研究を進めた。
- その結果、記録を通して子ども理解が深まり、子どもの育ちに合わせた働きかけができるようになった。また専門家とのケース会議により、発達に課題のある子どもへの理解が深まり、保護者支援も円滑に行えるようになった。さらに異年齢交流では、思いやりの心や伝える力が育つとともに、普段は目立たない子も役割を持ち意欲的に活動する姿が見られるようになった。現在は、すべての子どもの育ちを支えるため記録の継続と異年齢保育の日常化、専門家とのケース会議の継続に取り組んでいる。

2 討議の概要

<園内の体制について>

- ・ケース会議や職員会議で情報共有を行っている。
- ・園児数の少ない園は情報共有がしやすい一方で、話し合う場が十分に確保できていない園もあり、情報共有の必要性を感じている。
- ・子どもについてゆっくり話し合う場を設けることが難しい現状がある。
- ・園長や主任の段階で話が止まってしまい、職員全体で情報共有ができないことがある。

<園外とのつながりについて>

- ・療育施設による巡回指導を年2回実施し、支援につなげている。
- ・園内に巡回指導チームがあり、対応を行っている。
- ・療育機関と情報共有を行い、療育の見学も実施している。
- ・就学に向けて、サポートブックやサポートシートを活用している。

- ・月に2～3回、専門家と話し合う場があり、子どもにとっても保育者にとっても大きな支えとなっている。
- ・10日間継続してCLM（チェックリスト）を用いて子どもの様子を観察し、保育の見立てや手立てにつなげている。
- ・年に3回、言語聴覚士や理学療法士が来園し、相談できる機会が設けられている。
- ・保護者に伝えにくかったり、保護者の理解が得られない場合には、市や専門機関につなぎにくいこともある。

3 助言者の言葉

園内・園外の体制づくりにおいては、特に「グレーゾーン」と呼ばれる子どもへの対応に、外部の専門家の力が必要になることが多い。そのため、日頃の保育の中で保育者が子どもの様子をよく観察し、気づくことが重要である。また、保護者が子どもの状況を受け入れるには大きなエネルギーが必要となる。検査結果や園での様子を動画などで客観的に示すことも有効であり、難しい内容については専門職から伝えてもらうことも必要である。保育者は日頃から寄り添いながら支える存在となり、専門的な支援は専門職と連携して進めていくことが大切である。

情報共有の場が確保しにくい場合には、あらかじめ予定に組み込むことや、掲示板やICTの活用などにより情報を共有する方法も有効である。また、発達障害と愛着障害は行動が似て見えることがあり、判断が難しい場合も多いため、子どもの背景を理解し、「なぜその行動が起こるのか」という視点で見立てを行うことが重要である。

園外の専門職との連携も不可欠であり、トラウマを抱えている可能性を想定する「TIC（トラウマ・インフォームド・ケア）」の視点も参考になる。園は子どもにとって安心・安全な場であることを最優先にし、必要に応じて専門家につなぐことが求められる。さらに、子どもにも保護者にも、それぞれの状況に応じたオーダーメイドの支援を行うことが大切である。



第3分科会 保育者の資質向上を図り、保育現場の魅力を発信する

【司会者】	愛知県 江南市立布袋東保育園	園長	戸塚 春美氏
	岐阜県 加茂学園	園長	佐藤 敦史氏
【助言者】	岐阜県 中部学院大学	教授	西垣 吉之氏
【意見発表者】	石川県 かほく市立みずべこども園	園長	川端 麻弥氏
	岐阜県 池辺こども園	園長	若山 芙蓉氏
【記録者】	岐阜県 関ヶ原町立東保育園	主任保育士	大倉 文乃氏
	岐阜県 瑞浪市立みどりこども園	園長	堀 幸恵氏
【幹事】	岐阜県 大垣市立綾里こども園	園長	國枝 美智子氏

1 意見発表の概要

- 「保育者の資質向上を図る ～保育参加を通して～」 石川県 かほく市立みずべこども園
コロナ禍の影響により、園内行事の在り方を見直す中で、保育参加に焦点を当て園内で話し合いを行った。問題点と改善策を整理し、0・1・2歳児に「育児担当保育」を導入したほか、保育ノートの活用、動画研修やエピソードの共有、アンケートの実施、保護者面談や職員面談を行った。
- その結果、保護者にも子どもの育ちや姿が伝わり、より信頼関係が深まった。また、子ども理解の大切さを再確認するとともに、保育者自身が気づきを得たり、知識を高めたいという意識が高まったりするなど、良好な人間関係が保育者の資質向上につながった。

- 「保育者の資質向上を目指して」 岐阜県 池辺こども園
保育の資質向上の過程を、以下の3本柱の実践に取り組む過程として捉えている。

1 『非認知能力の育み』

- ・モンテッソーリ教育の遊びや合奏あそびの実践。
- ・【非認知能力はぐくみ表】の作成・活用。
- ・【子どもの輝き】の記録。

2 『Iメソッド』

- ・愛に包まれた教育・保育の基盤としての環境づくり。
- ・幸せな居場所づくり。
- ・先生の深い愛情と笑顔に包まれる環境づくり。
- ・育みはプロセスであるという考え方。
- ・「みんなは一人のために、一人はみんなのために」の実践。

3 『Fカイゼン・サイクル』

- ・Fカイゼン・サイクルの「フローチャート」を作成。
- ・「カイゼン・サイクル」(研修→公開→カイゼン→カイゼン策の実践)の活用。

2 討議の概要

テーマ「“保育者の資質向上”や“保育現場の魅力を発信”について園の実践と今後の課題」

<園の実践>

- ・チーム担当制の実践(2人担任で複数クラスをローテーションする)。
- ・写真販売やドキュメンテーションを通して、日々の保育の様子や保育者の思いを伝える。
- ・園内外での公開保育の実施や研修の受講。
- ・自分の保育を振り返るためのマインドマップを作成し、年齢別研修で活用する。

<今後の課題>

- ・育児担当制の導入を検討しているが、現状では一斉保育になってしまうことや、世代間で保育観のズレが生じることがある。

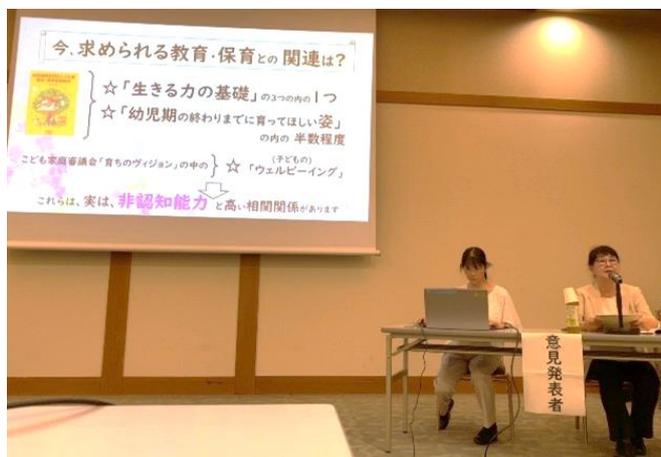
- ・職員間のコミュニケーション不足。管理職によるボトムアップの取組や、声をかけやすい工夫が必要である。
- ・時間的・人的な余裕が不足している。
- ・保育現場の人材確保に向けて、中高生に保育の魅力を伝えていく必要がある。

3 助言者の言葉

「保育の質」とは、10人いれば10通りの考え方があるものであり、その捉え方はそれぞれのキャリアやこれまでの体験・経験によって異なる。まずはこの前提に立つことが大切である。

保育の場は、人間関係が複雑に絡み合う職場である。人には感情があるため、すべてをマニュアル化することはできない。だからこそ悩むのは当然であり、正解がないからこそ模索し続けていく必要がある。また、「共有できている」という思い込みが生まれることもある。見えにくい保育の世界を言語化し、その考え方を互いに押し量りながらすり合わせていく積み重ねを通して、少しずつ共有していくことが求められる。

「質の高い職員集団」とは、自分自身の人間観・職業観・保育観を常に見直す力を持ち、職員とともに子どもや保護者の育ちを喜び合える集団である。また、保育の魅力や喜びを語る力、多様な考え方に耳を傾け自分自身を振り返る力、そして自らが変わらなことをいとわない姿勢が求められる。最終的には、自分が果たすべき責任を引き受ける覚悟を持つことも大切である。



第4分科会 地域の子育て家庭への支援の充実にむけて

【司会者】	富山県 入善町立さわすぎ保育所	所長	野坂純子氏
	岐阜県 岐南さくら南認定こども園	園長	中島愛子氏
【助言者】	岐阜県 中部学院大学	教授	服部吉彦氏
【意見発表者】	石川県 キッズランドいなみえん	副園長	向出由美子氏
	岐阜県 海津市立高須認定こども園	園長	山下早苗氏
【記録者】	岐阜県 多治見市立市之倉保育園	園長	長谷川昌子氏
	岐阜県 安八町立ふたばこども園	主任保育士	下野幸世氏
【幹事】	岐阜県 神戸町立神戸幼児園	園長	小倉英香氏

1 意見発表の概要

○『つながる安心、子育て親子の憩いの場を目指して』～安心した園生活につながる支援～

石川県 キッズランドいなみえん

地域の子育て支援の拠点となるこども園を目指し、①「なかよしひろば」を中心とした地域子育て支援の取組、②地域子育て支援において保護者との信頼関係づくりや養育サポートを大切にすること、③地域社会資源とつながった関係機関との連携、④こども園併設ならではの子育て支援のあり方について、職員会議やグループワークを通して検討し、実践してきた。

その結果、こども園は利用者にとって「日常生活の中にある子育て支援施設」であり、信頼関係が「安心した子育て」や「安心した園生活」へとつながることを実感した。今後も「子育てに伴う喜びを実感できる場」を提供し、地域の子育ての拠点となるこども園「なかよしひろば」を目指していきたい。

○「～『私たちができる事は何か?』を考える～」

岐阜県 海津市立高須認定こども園

不登校やひきこもり、出生率の減少、高齢化などは、一見すると保育に直接関係のない問題のように感じられるが、無関係とは言い切れない。そこで、こども園として何ができるのかを考え、次の取組を行った。

1. 地域の子育て家庭への発信として、子育て支援センターに向けたこども園見学ツアーの実施や一時預かり保育を行い、保護者支援の充実につなげた。
2. 地域とのつながりを広げるため、地域の方の協力を得て「お茶会」や「読み聞かせ」を実施した。また、年3回、園の近隣の方を招いて情報交換や交流の機会を設けた。
3. 気軽に相談できる場として「なごみサロン」を設置し、園だけでなく小学校や家庭での子育て、孫育てについても相談できる窓口とした。

これらの取組を通して、今「何ができるか」を考え実践していくことが、地域の子育て家庭への支援の充実につながると感じた。今後も地域の力を生かしながら、親も子どもも、ゆとりをもって生活できる環境づくりに向け、こども園から発信していきたい。

2 討議の概要

1. 子育て支援の取組について話し合う中で、大切にしていることとして、保護者の孤立感をなくすことが挙げられた。ホームページなどで悩み相談の情報発信を行うほか、私立園だからこそできる取組もある。子育てはみんなですという雰囲気や協力体制があり、様々な取組があるコミュニティーの中で、保護者同士が異変に気付くこともある。また、支援する側・される側という垣根をなくすことも大切である。
2. 子育て支援センターの利用者が少ないため、保健センターの健診時や児童館などの施設での周知、保健師が各家庭を訪問した際の案内、療育の専門家との連携などを行い、利用者の増加と地域の子育て家庭への支援につなげている。
3. 地域の特性を生かした取組として、小規模園の支援センターであることから地域の運動会に参加するなど、地域とのつながりを深めている。また、園に足が向きにくい保護者に対してはアプリ配信などで情報発信

を行い、保健センターなど関係機関との連携も大切にしている。一方で、都市部や私立園では関係機関とのつながりが難しい場合もある。

4. 各園の取組として、朝の受け入れ時の挨拶から保護者の様子を見て担任につなげることの大切さが挙げられた。また、保護者が情報過多になっている現状を踏まえ職員の資質向上に努めているほか、保護者同士のつながりを大切にするため園行事への参加を促している。さらに、広報による周知や園庭開放の実施、関係機関との連携などを通して地域とのつながりを広げている。

3 助言者の言葉

子育て支援において共通して重要なポイント（連携・協力・協働・理解促進）として、①保護者が子育ての楽しさや喜びを実感できるようにするにはどうするか、②保護者と子どもの愛着関係をどのように育むか、③子育ての主体者として保護者に自覚をもってもらうにはどうするか、④保護者に養育力をどのように身に付けてもらうか、⑤保護者同士の適切なつながりをどのようにつくるか、⑥地域の教育力をどのように生かすか、がある。

保護者の子育てへの意識は高く、愛着（アタッチメント）形成は、子どもが不安なときに信頼できる人に寄り添い安心しようとする行動であり、幼児期の子育ては非常に重要である。しかし、子育てがうまくいかない場合や自ら支援を求めることができない人に対しては、支援する側から積極的に働きかける（アウトリーチ）ことが必要である。そのため、保育者は意図的に環境を整え、保育指針に基づき、地域の子育て家庭の保護者等への支援を行うことが求められている。

また、保護者は子どもの集団性や社会性についても不安を抱える中、子育て支援センターや園が保護者の居場所となり、組織的な取組として機能している。関係機関との継続的な情報交換を行いながら、課題をその都度解決していくこと、早期発見・早期対応や未然防止に努めることが重要である。さらに、職員が高い目的意識を持ち、実践や経験を大切にしながら子どもの成長に応じた支援を行い、保護者と地域との関係性を育てていくことが求められる。保護者と子どもの双方を支援し、親も子も一人でできることを増やしていくことで、子育てには手間暇がかかるものの、子どもの力を育てる大切さを実感し、支援を求めながら子育ての楽しさや喜びを感じられるようになる。



第5分科会 子どものより良い育ちと安全・安心の環境づくりにむけた関係機関とのネットワーク

【司会者】	愛知県 中山保育園	主任保育士	川 寄 千代子 氏
	岐阜県 聖徳保育園	園長	奥 田 浩 順 氏
【助言者】	愛知県 桜花学園大学	教授	ターリソル 規 子 氏
【意見発表者】	富山県 わかば子育て支援センター	所長	杉 林 聡 美 氏
	福井県 大島認定こども園	園長	角 野 章 香 氏
【記録者】	岐阜県 多治見市立星ヶ台保育園	園長	川 西 有 潔 氏
	岐阜県 土岐市立妻木こども園	園長	後 藤 聡 子 氏
【幹事】	岐阜県 美濃加茂市立山之上こども園	園長	三 宅 りえ子 氏

1 意見発表の概要

○「つながる力で守る 子どもの豊かな育ち」 富山県 わかば子育て支援センター

1. 子どもの発達支援と職員のネットワーク

「保育所等訪問支援」を発展させたケース会議「作戦会議」を、臨床心理士とともに定期的に行っている。また、職員が療育施設を訪問し子どもの様子を共有することで、支援の質の向上につながっている。

2. 地域資源と連携した育ちと社会貢献のネットワーク

- ・「平林里山整備の会」と連携し、四季折々の自然に触れながら園外保育を定期的に行っている。
- ・「NSみどりの会」と連携し、野菜栽培や収穫、調理を通してSDGsや命の循環について学んでいる。日常的な交流を通して相互理解も深まっている。さらに、農業復興課の補助制度を活用し、農地保全や収穫物を生活困窮家庭や子ども食堂へ提供するなど、地域貢献にもつなげていきたいと考えている。

3. 防災に関する地域のネットワークの構築

防災士資格を持つ地域の相談役と連携し、計画や訓練を見直すことで職員全体の防災意識が高まった。非常食の調理体験、防災用品の使用訓練、備蓄品の再点検など具体的な備えを強化している。また、園長と副園長も防災士資格を取得し、地域住民と連携した「自主防災組織」の立ち上げに向けて取り組んでいる。

○「子どもの未来を支える地域のつながり」 福井県 大島認定こども園

1. 地域の方との交流

- ・年長児が漁師の奥さんの指導のもと、毎年調理実習（アジのフライ）を行っている。食材や栄養の大切さを知り、食への関心が深まるとともに、社会性や感謝の気持ちを育んでいる。
- ・地域の方と一緒に芋の苗植えや芋掘りを体験している。地域の方と触れ合い顔見知りになることで、地域の中で育っていることを実感し、感謝の気持ちを伝える機会となっている。
- ・高齢者施設の企画で園児が施設を訪問し、歌や踊りを披露したり、手遊びやゲームを一緒に行ったりしている。毎年交流を重ねることで関係が深まっている。

2. 地域行事への参加

- ・町と園、連絡協議会が連携し、毎年合同運動会を開催している。社会性や協力することの大切さを学ぶ、心に残る行事の一つとなっている。

3. 地域子育て支援活動

- ・交流の場の提供や育児情報の発信、子育て相談などを、子育てマイスターや職員がそれぞれの得意分野を生かして行っている。

4. 地域消防署・警察との交流

- ・消防士立ち合いのもと避難訓練やスモーク体験を行い、警察の方による防犯指導も実施している。どのように行動すればよいかを学び、命を守る取組となっている。

5. 保幼小中との交流

- ・小学校の秋祭りや体験入学に参加するほか、職員同士で授業参観や保育参観を行い、共通理解のもと子ども

の成長を支えている。

- ・中学生が家庭科の授業の一環で来園し、園児との触れ合い体験を行っている。

2 討議の概要

<発表園の活動が「子どものよりよい育ち」「安全・安心の環境づくり」にどのようにつながっているか>

- ・地域の人との距離が近く、行事だけでなく日常的な関わりを積み重ねることで、地域の中で子どもを見守る環境づくりにつながっている。
- ・小さい頃から地域の方と関わることで地域への愛着が生まれ、卒園後の関わりや次世代へのつながりも期待できる。また、子どものつながりをきっかけに保護者同士の関係も広がり、地域で子育てを支える環境づくりにもつながっている。
- ・自然体験や農業体験は保育者だけでは難しい場合もあるが、地域の方の協力を得ることで実現できる。防災の面でも地域とのつながりや助け合いの大切さが再認識され、園からの発信を通して地域との連携を深めていくことが重要である。

<各地域・保育所・こども園における関係機関とのネットワークについて>

- ・高齢者施設との交流、地域の方やJAと連携した畑づくり、小学校との交流（散歩コースでの関わり、保育参観・授業参観など）、地域行事（祭りや体育祭等）への参加などが行われている。
- ・警察や消防署との連携、療育施設や保健師とのつながりなど、関係機関とのネットワークづくりに取り組んでいる。療育職員が頻繁に来園することで、園・保健師・療育機関との連携が強まり、発達相談につながりやすい体制となっている。
- ・地域性や文化の違いによって関係づくりの難しさもあり、地域交流を担う拠点やネットワークが必要である。

3 助言者の言葉

連携には、「絶対に必要な連携」と「子どもたちのよりよい育ちのためにさらにあるとよい連携」の二つの視点がある。

まず、絶対に必要な連携として、防災などの危機管理に関する連携がある。万が一の災害時に備え、地域や関係機関とどのようなつながりを持ち、どのように対応していくのかを日頃から考え、体制を整えておくことが重要である。また、発達支援、貧困、不登校、多文化共生などの課題についても、子どもだけでなく家族全体を受け入れて支えていく視点が必要であり、関係機関と情報共有を行いながら、専門家を交えてともに考えていく関係づくりが求められる。

次に、子どもたちがより楽しく充実した生活を送るための連携として、子どもの興味や関心を出発点とし、地域の人や施設、店舗などへとつながっていく子ども主体の取組があげられる。既存の制度や環境を受け身で捉えるのではなく、地域の資源をどのように活用していくかを主体的に考えていく姿勢が大切である。また、小学校との連携については、互いの保育・教育を知り合い理解を深めることから始めることが重要であり、「こどもまんなかチャート」や「幼保小の架け橋プログラム（かけ橋カリキュラム）」などを参考にしながら、行政とも連携して進めていくことが望ましい。

こうした継続的なつながりの中で、子ども自身が地域に見守られていることを感じ取ることが大切であり、子どもを見る視点が変わることで理解や関わり方も変わっていく。さまざまな取組を楽しみながら創意工夫し、連携を広げていくことが重要である。



第6分科会 家庭や地域との連携による食育の推進

【司会者】	石川県	ななおあいじこども園	園長	梶本みのり氏
	岐阜県	池田町立西保育園	園長	山本早霧氏
【助言者】	三重県	皇學館大学	教授	駒田聡子氏
【意見発表者】	愛知県	春日井市立勝川北部保育園	園長	榊原優子氏
		春日井市立坂下北保育園	園長	松田佑紀氏
	岐阜県	川辺町第1こども園	主幹保育教諭	酒井友美氏
		川辺町第3こども園	主幹保育教諭	田口美広氏
【記録者】	岐阜県	白川町立白川保育園	主任保育士	今井朝美氏
	岐阜県	明応こども園	園長	佐々木真氏
【幹事】	岐阜県	可児市立めぐみ保育園	園長	伊藤由紀子氏

1 意見発表の概要

○「こどもをまんなかにした食のつながり」 愛知県 春日井市立勝川北部保育園・春日井市立坂下北保育園
【心身ともにたくましく、よく遊ぶ子どもを育てる】という保育目標のもと、楽しく食べることを通して生きる力を培う実践に取り組んでいる。

・味見当番

食への関心を広げることを目的に、五感を働かせながら味を確かめ、自分の知っている言葉で表現する経験を重ねている。家庭でも給食に関する話題が増え、園・子ども・家庭のつながりを感じている。

・コンポストの取組

給食で使った野菜の切れ端を土に混ぜて土づくりを行い、その土で野菜や花を育てることで、命のつながりを体験している。

・野菜の物々交換

収穫した野菜を保護者や地域の方と物々交換することで、人と人とのつながりを感じる機会となっている。

このように、食育は子どもが体験を通して学ぶことで、思考力の芽生えや生命尊重、言葉による伝え合いなどの資質・能力を育むものであり、その中心には子どもの笑顔がある。

○「家庭・地域と連携した“噛む力”を育む食育の取り組み～かみかみ週間を通して～」

岐阜県 川辺町第1こども園・川辺町第3こども園

子どもたちの噛む力の低下に着目し、年齢に応じた現状と課題を探りながら、咀嚼への関心を高める取組を行っている。

・お米づくり

地域の方の協力を得て米の栽培・収穫を行い、収穫した米を給食で提供している。よく噛むことでお米の甘みを感じる体験につながっている。

・野菜づくり

地域の方や食生活改善推進協議会の協力を得て、野菜づくりやクッキングを行っている。自分たちで育て、調理することで食べる意欲につながっている。

・給食時の関わり

年齢に応じて保育者が声をかけ、食材の食感や噛む音などに気付けるよう関わっている。

楽しみながら「噛むこと」への関心を育む活動を取り入れることで、子どもたちの成長や家庭での生活にもつながっている。今後も、生きる力を育む食育活動を継続していきたい。

2 討議の概要

<食べることが好きな子について>

味見当番を行っている園は多く、それぞれの実情に合わせて取り組んでいる。偏食が改善したり、食への興味が高まったりするなどの効果を感じているとの意見があった。また、食事の際に保育者が味やにおい、固さ、噛む音などに気付けるよう何気ない声掛けをすることで、子どもたちは五感を働かせながら食べることができる。さらに、クッキング活動は食べる意欲につながるとの意見もあった。

<噛む力>

食べ物を前歯で噛み切ることが難しく、皿の上で小さくして食べている子も見られる。保育者が手本を示しながら、口の動かし方や歯の使い方を伝えていくことが大切であるとの意見が出された。

<食育を通じた家庭・地域とのつながり>

収穫した野菜を家庭に持ち帰る際に、どのように食べるかなどを話題にすることで家庭とのつながりが深まる。また、園での食育の取組を家庭に発信し、家庭での子どもの様子や話題になったことを知らせてもらうことで、園と子ども、家庭のつながりが広がっていくとの意見があった。

3 助言者の言葉

乳幼児期は「食べることが楽しい」と子どもたちに伝えていくことが大切であり、食は子どもの最善の利益につながるものである。保育者の今の関わりは、子どもたちの生涯にわたって影響していく。食事の場面で「早く食べなさい」「好き嫌いはいだめ」といった大人の都合を優先するのではなく、食事を楽しみ合える子どもに育つよう、さまざまな食体験を重ねることが重要である。多様な食体験を積むことで、子どもは食べることに積極的になっていく。

また、園から「朝ごはんを食べましょう」「よく噛んで食べましょう」と発信する際には、その理由や根拠を丁寧に伝えることが必要である。家庭での様子を園に伝えてもらい、それを踏まえて園から発信していくというPDCA（Plan・Do・Check・Action）のサイクルを繰り返すことで、目指す子どもの姿に近づいていく。

食育はイベントとして行うのではなく、日々の保育の中で継続して取り組むことが大切である。保育者一人一人が食への関心を持ち、0歳児から5歳児までの連続性を意識した食育を進めていくことで、子どもたちは食を楽しむことができるように成長していく。



第7分科会 保育の社会化にむけて～保育の営みをいかに社会に発信するか～

【司会者】	富山県	しんでん保育園	園長	高 稲 純 代 氏
	岐阜県	岐南さくら南認定こども園	総括	堀 裕 美 氏
【助言者】	岐阜県	岐阜大学	教授	春 日 晃 章 氏
【意見発表者】	三重県	大台町立川添保育園	園長	木 下 友 利 子 氏
	岐阜県	こま草保育園	園長	中 林 都 氏
【記録者】	岐阜県	関市立武儀やまゆり保育園	園長	土 屋 美 樹 氏
	岐阜県	飛騨市立宮城保育園	主任保育士	大 坪 亜 由 美 氏
【幹事】	岐阜県	大八保育園	園長	川 原 由 美 子 氏

1 意見発表の概要

○「豊かな自然の中で、地域の人々とのふれあいを大切に」 三重県 大台町立川添保育園
若い世代の減少や少子化が進む中、保育園と地域がどのようにつながりを持つことができるかを課題として取り組んでいる。地域の方による読み聞かせや田畑づくりへの協力など、人とのつながりを生かした活動のほか、木育活動や自然学校など地域資源を活用した保育、さらに学校との交流などを通して地域との関係づくりを進めている。また、保護者や地域に対してさまざまな方法で活動の様子を発信している。地域を巻き込みながら子どもとのつながりを大切にするこは、子どもたちの地域への愛着を育むことにもつながっている。

○「地域で子育て丹生川の町」 岐阜県 こま草保育園
コロナ禍で活動を制限していた時期には、紙面での発信など工夫をしながら、地域との関わりを継続してきた。コロナ明けにはさまざまな活動を再開し、多様な分野の人々との交流を通して地域とのつながりを深めている。こうした活動は、楽しさだけでなく子どもたちの学びにもつながっている。

交流後には感謝の気持ちを込めて地域の方を園に招き、一緒に給食を食べる機会を設けたり、年長児が仕込んだ味噌を一年後に地域の方と共に味わうなど、継続的な関わりが築かれている。また、園で楽しく体力づくりに取り組むことが、その後小学生になって陸上クラブに入部するなど、子どもたちの自信につながった事例もある。

園名の由来となる「こまくさ」の花を、地域の協力のもと乗鞍岳まで見に行く活動も行われており、地域と子どもたちの温かいつながりや関係性の深さが感じられる実践となっている。

2 討議の概要

<地域への発信の仕方について>

地域の方と関係を築くことで、保育園や子どもたちを温かく見守ってもらえるとの意見が出された。特に地域との距離が近い場所では関わりやすく、若い世代との交流を通して子育ての現状を知ってもらうことが大切であるとされた。また、市のホームページやインスタグラムなど、ICT を活用した情報発信の必要性も指摘された。

<園の立地条件について>

地域との関わりは、地域性によって持ちやすさに差があり、都市部では難しい場合もあるとの意見があった。一方で、コロナ禍で中断していた活動を再開している園も多く、再開後も継続的に働きかけや行動を起こすことが重要であるとされた。

<地域の方や保護者の協力について>

地域から声をかけてもらうこともあるが、園側から積極的に発信していくことも重要であるとの意見があった。また、公立園は職員の異動がある一方、私立園では異動が少ないため、継続的な関わりを築きやすい面もあるのではないかという意見も出された。

各グループではそれぞれの視点から社会との関係性について討議が行われ、現代においては ICT を活用した

情報発信が重要であることが共有された。発信を通して地域の人々を巻き込み、保育や子育ての現状を知ってもらいながら、地域とともに子どもを育てていくことの大切さが確認された。

3 助言者の言葉

発表された2園の実践は、いずれも日頃の保育の中から課題やヒントを見つけて取り組まれており、発表の形態も工夫されていた点が評価できる。また、核家族化や少子化が進む中で、地域の高齢者との温かい交流が見られたことは、子どもたちにとっても地域にとっても大変意義のある取組である。子どもの純粹無垢な姿は人の幸せにもつながるものであり、今後もそれぞれの園の特性や地域の良さを生かした実践を進めていくことが期待される。

地域の良さを「園の強み」として発信していくことも大切であり、まずは園長や職員が地域の魅力を知り、楽しみながら保育に取り入れていくことが子どもたちにも良い影響を与える。また、今後は若い保育者の発想や視点を生かした地域との関わりや地域貢献の在り方についても広がっていくことが望まれる。

さらに、保育者は表情豊かであることが強みであり、その豊かな表情は保育を行う上での大きな力となる。保育は大切でやりがいのある仕事であることから、地域や社会に向けて積極的に発信していくことが重要である。近年はSNSでの発信も増えているが、若い世代の利用については適切な管理や配慮も必要である。

グループ討議では、地域環境の違いはあるものの、まずは保育者自身が楽しみながら子どもと関わることの大切さが共有された。保育者の豊かな表情や日々の保育の姿を通して地域とのつながりを深め、継続的に発信していくことで保育の魅力を社会に伝えていくことが重要である。



第8分科会 公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割

【司会者】	福井県 美浜町立あおなみ保育園	園長	田辺英子氏
	岐阜県 恵那市立飯地こども園	園長	鈴木圭子氏
【助言者】	岐阜県 岐阜市子ども保育課	課長	坪内達也氏
【意見発表者】	三重県 松阪市立飯南ひまわりこども園	園長	高瀬美紀氏
	富山県 高岡市立はおか保育園	副園長	中田都氏
【記録者】	岐阜県 土岐市立みなみこども園	園長	藤田佳代氏
	岐阜県 中津川市立福岡保育園	園長	林あい子氏
【幹事】	岐阜県 岐阜市立市橋保育所	所長	荒木智子氏

1 意見発表の概要

○「地域と共に育つこども園」 三重県 松阪市立飯南ひまわりこども園

こども園として地域に何ができるかをテーマに、地域の現状やこれまでの取組について発表があった。地域では過疎化や少子化が進み、園児数の減少や子育て家庭の孤立といった課題が見られる。こうした状況の中で、散歩や地域行事への参加、各団体との交流などを通して地域の方とのコミュニケーションを図っている。また、地域版だよりの発行や園庭開放を行い、子育てに関する相談や情報発信にも取り組んでいる。

さらに、小学校や高校、子育て支援センターなど関係機関との連携を図るとともに、管内サポート会議に参加することで、子どもたちへの途切れない支援につなげている。また、散歩や地域の生活に触れる活動を通して、子どもたちに郷土の良さを伝える取組も行っている。

コロナ禍以降、人との関わりが希薄になっていた子どもたちであったが、地域のさまざまな人と触れ合うことで、自分たちが地域の中で大切にされている存在であることに気づき、自信につながっている様子が見られた。こうした実践を通して、園として地域に何ができるかという視点だけでなく、地域の一員として多くの人と関わりながら共に育っていくことの大切さを改めて感じた。また、地域の豊かな自然や暮らしの魅力を、地域の方とともに子どもたちへ伝えていきたい。

○「こども誰でも通園制度の試行的事業への取り組みから見る公立保育園のあり方について」

富山県 高岡市立はおか保育園

核家族化が進む中、子育てについて相談できる人や協力者がいないなど、悩みを抱える保護者が増えていることを背景に、県内で初めてとなる試行的事業として、令和6年11月より取組を開始した。

事業を通して、保護者からは「入園前に園での様子を知ることができ、今後の入園の参考になった」「保育者の言葉に気持ちが楽になった」などの声が聞かれ、前向きな反応が見られた。また、子育てに悩む保護者と向き合い助言を行う中で、保護者が前向きに子育てに向き合う姿が見られたことは、保育者自身のやりがいや手応えにもつながった。

一方で、本制度が目指す「子どもの健やかな育ちを支える支援」としての役割については、一時預かり事業との違いが十分に明確になっていないという課題も見られた。制度の趣旨をどのように伝え理解を得ていくかが今後の課題である。今後は実態を行政にも伝えながら共に検討を進めるとともに、令和8年度の本格実施に向け、市内での取組のモデルとなるよう、市全体の保育の質の向上や子育て支援の拠点としての在り方について引き続き考察していく。

2 討議の概要

意見発表を踏まえ、公立園として「変わらないこと」「変わっていくこと」を柱に討議を行った。

<変わっていくこと>

ICTを活用することで業務の軽減につながり、働き方改革の推進が期待されるほか、園での子どもの様子を家庭へ迅速に伝えることができ、家庭での会話が増えるなどの効果があるとの意見があった。また、未就園児

の保護者支援においても、情報発信の手段として ICT の活用が重要であるとの意見が出された。一方で、書類作成については選択入力方式が子どもの実態に即しているのかという課題も挙げられた。さらに、保育補助員の配置についても、業務負担の軽減につながる取組として意見が出された。

<変わらないこと>

公立園として担うべき役割や行政との連携の重要性が挙げられた。特に支援が必要な家庭への関わりにおいては、常に行政と連携しながら情報共有を行い、見守りや援助を継続していく体制が重要であるとの意見が出された。また、これまで受け継がれてきた保育の質や地域とのつながりを大切にしていくことも重要であるとされた。そのためにも、保育者自身が研修等に参加して知識を深め、豊かな経験を積むとともに、若い職員の育成にもつなげていく必要があるとの意見が共有された。

3 助言者の言葉

<意見発表について>

公立園の強みとして行政と連携しやすい点が挙げられる。現場の実態を行政に伝えながら共に考え、よりよい連携体制を築いていくことが重要である。また、開かれた園として地域の方とともに子どもを見守り育てていくことや、子どもへの支援が途切れないよう各関係機関（行政を含む）との連携を大切にしていく必要がある。

一時預かり事業と子ども誰でも通園制度は利用の趣旨こそ異なるものの、子どもにとっては同じ保育であることを踏まえた対応が求められる。誰でも保育を利用できる受け皿として公立園の役割は大きいですが、その一方で保育者の負担が生じることも考えられるため、行政としても必要な支援を行っていくことが重要である。

<グループ討議について>

岐阜市内には公立園のない地域もある中で、公立園が担っている役割は大きいと感じる。また、配慮を必要とする子どもについても、各関係機関と連携しながら引き継ぎを行っている現状がある。今後も園同士で話し合いながら課題を整理し、行政とともに解決に向けて考えていくことが大切である。さらに、公立園としてこれまで大切にしてきたことを守りつつ、行政と連携しながら新しい取組にも挑戦していく姿勢が求められる。



大会宣言

木々の緑がまぶしく輝く初夏の岐阜に、東海北陸6県から保育関係者が一堂に集いました。ここ岐阜は、山紫水明の美しさをたたえ、木曾三川が大地を潤し、四季折々の自然が子どもたちの感性を育む豊かな風土です。

今日、社会が大きく変化する中で、子どもや家庭、そして保育現場が抱える課題は複雑化、多様化しています。そんな今だからこそ、一人ひとりの子どもたちの育ちを尊重し、子どもたちが自分らしく生きる力を身につけられるよう、私たち保育者は専門性を磨き続ける必要があります。

保育の現場では、日々、喜びや子どもの成長に出会うとともに、悩みや葛藤も少なくありません。しかしだからこそ保育は奥深く、やりがいのある仕事です。

どの子どもにもその子らしい光があり、私たち保育者は、その光を見つけ、そっと支える存在でありたいと願っています。

これからも私たちは、保育の原点を忘れず、子どもたちのために、仲間と学び、支え合いながら、保育の質を高めていくために日々研鑽していきます。

豊かな自然と、歴史と、人の温かさに恵まれた岐阜の地から、すべての子どもたちの最善の利益の保障を願い、社会からの要請に応え、地域の幼児教育・保育施設ならびに地域の子育て支援センターとして、その社会的使命を果たしていくことをここに宣言いたします。

令和7年7月17日

第66回東海北陸 教育・保育研究大会「岐阜大会」